

空を飛んだ吉蔵

〈登場人物〉

吉蔵

慈空

弥助

和尚

つる

村人 1

村人 2

村人 3

子供 1

子供 2

子供 3

子供 4

村娘たち

村の女

庄屋の家の女中

庄屋の娘（吉蔵の女房）

吉蔵の息子

1

村人 1 見たか。

村人 2 ああ、見たさ。

村人 1 おかしかったなあ。

村人 2 まったく大笑いだ。

村人 3 おい、いったい何の話だ。

村人 1 おまえ、見なかったのか。

村人 3 何を？

村人 1 吉蔵さ。

村人 3 吉蔵って、あの吉か。吉蔵がどうか

したか、俺は知らんぞ。

村人 2 そりゃあ、惜しいことをした。

村人 3 もつたいぶるな。何があったか教え

てくれ。

村人2 ひっひっひ。あのざまを思い出すだけでおかしくて腹が痛くて、ああ、たまらん。おまえ、話してやれ。

村人1 吉蔵のやつがな。ふっふ、かつ、か
らすになった。

村人3 吉蔵がからすに？

村人2 そうさ、からすさ、くっくっく。

村人3 ええいっ、きちんと話せ！

村人1 俺が道を歩いていたら、吉蔵のやつが首から札を下げてやってくるんだ。よくみたらその札に「からす」と書いてある。おい、吉さんよ、そりゃあ、何のまじないかねと聞いたたら。

村人3 聞いたたら？

村人1 これが、俺の新しい名前でございますますだと……いっひっひ。

村人3 新しい、名前だと？

村人2 弥助さ。あの悪党がまたろくでもないことをふきこんだのさ。

舞台が明るくなると、そこは吉蔵の家。
粗末なつくりである。屋根に上って、盛んに手をはばたかせている吉蔵。
弥助が通りかかる。

弥助 やい、吉。吉蔵っ。おまえ、そんなところで何をしてやがる。

吉蔵 ああ……弥助さ。こりゃあ、えらいところを見られた。

弥助 けっ、気色悪いやつだ……それで、何を
してるんだ！

吉蔵 たいしたことではない。

弥助 たいしたことでないなら、聞かせる。

吉蔵 でも、ちよつと恥ずかしい。

弥助 恥ずかしいという面か。ははん、さて
は何か悪い企みだな。

吉蔵 そんなのではない、絶対にそんな
はない。

弥助（苛立つて）なら言え、さっさと
言え、この野郎。言わねえつもりな

ら、そこへ上っていくぞ。

吉蔵 そう、怒らなくてもいいではないか。
ならば言う。でも笑わねえか？

弥助 笑う？ 笑わねえ、笑わねえ、笑うも
んかい。

吉蔵 ……俺、鳥の真似をしていた。

弥助 何？ 何の真似だと。

吉蔵 鳥だ。

弥助 鳥というのと、こういう鳥か（はばたく
仕草）。くくく、そりゃいい（大笑い）。

吉蔵 やっぱり笑う。

弥助 これが笑わずにいられるか……ふん、
鳥ねえ。おまえ、鳥になって何とする？

吉蔵 空の上に、飛んでいけたらと。

弥助 空の上に……はあ？ 空の上にだと！

吉蔵 ああ。一度でいいから、あの空を鳥の
ように飛んでみてえ。

吉蔵の唄。『もしも空が飛べるなら』

もしも空が飛べるなら

ずっとずっと高くまで

かなうのならば雲の果て

そこは亡くなった者たちが

住んでいるところ

いつも見守っていてくれる

父母（ちちはは）がいるところ

もしも空が飛べるなら

ずっとずっと遠くまで

かなうのならば山の向こう

そこは心やさしい娘が

暮らしている村

きつと縁（えにし）で結ばれた

片割れが待っている

弥助（独白）こいつ、おつかあが死んじまつ

て一人になってから、ますますおかしくな
ったらしい。よし、ひとつからかってや

るか……（吉蔵に）なあ、吉、おまえは、

本当に空を飛びたいのか。

吉蔵 あ、ああ、飛びたいな。

弥助 そうか、ならば俺が相談に乗らんでもないぞ。

吉蔵 弥助さんは、飛んだことがあるのか。

弥助 ないない、大体俺は飛びたいなどとは思わん。だが、これでもちったあ物知りの方だから、おまえの助けにもなろうというものだ。

吉蔵 そうか、それは……なあ、弥助さん、俺はおまえさんにさんざん馬鹿にされると覚悟してた。なのに、おまえさんは助けようという。それだけでもうれしいのだ。

弥助 馬鹿になどするものか。おまえが本気だというのに、そんなことできねえ。

吉蔵 弥助さん。

弥助 でもな、吉。おまえはただ願うだけで何もしねえ。

吉蔵 でも……。

弥助 でも、何だ？

吉蔵 何をしたらいいかわからん。

弥助 だからこの俺が、物知りの俺様が助けになるといつているじゃないか。

吉蔵 弥助さんは知ってるのか、空を飛ぶ方法を。

弥助 まあ、いろいろ知っている。だからといって、それがおまえにも通じるかどうかはわからん。考えてもみる。人がそんなに容易く空を飛べたら苦労しない。いろいろ試してみることに、じっくりやることに、それが大事だ。

吉蔵 うんうん、もつともだ。

弥助 そこでだ。まずは吉さんよ、おまえは名前を変えなきゃならんぞ。

吉蔵 名前？ 俺の名前をか？

弥助 そうよ。おまえの名前はいかん。吉蔵だぞ。吉、これはまあいい。次の蔵がいない。蔵（くら）なんて字、いかにも重そうで、これじゃ飛べるわけはないわ。

弥助が唄う。『名前の唄』

名は体をあらわすってね
つまらんものにはつまらん名が
えらそうなのにはえらそうな名が
ついでるものさ　これは真実
草でも木でも獣でも
花でも鳥でも魚でも

名は体をあらわすってね
つまらんやつに御大層な名を
みつともねえやつにきれいな名を
つけてはだめさ　これは道理
まじないみたいなものだけど
字画で織りなす厄と福

だから運命を変えたけりや
そうさ因果を逃れたきや
名前を変えるが一番さ
取り替えるのが簡単さ
古い着物は質に出し
新しいのでさっぱりと

吉蔵　弥助さん、どうしても名前を変えない
とまづいか？

弥助　いやなのか？

吉蔵　俺は、この名前が気に入ってる。それ
に顔もろくに覚えてねえ親父様のただ一つ
の形見みたいなものだし。

弥助　いやならよせ。これはおまえの決める
ことだ。

吉蔵　だけど……。

弥助　何だ、やっぱり本気じゃねえのか。あ
ほらしい。俺はおりた。

吉蔵　待って、待ってくれ……変える、変え
る。俺、名前を変える。

弥助　親父の形見じゃねえのか。

吉蔵　そうだが……親父様もきつと許してく
れるん……じゃねえかな。

弥助　ふん、まあいい。それで吉よ、おまえ

さん、どんな名が望みだ。

吉蔵 そうだなあ、空を飛びそうな名前ということだと……いっそ、鳥の名にしようと思うが、だめか？

弥助 いやいや、それは妙案だ。それで何の鳥にするのだ。

吉蔵 俺、とんびがいい。

弥助 とんびか。

吉蔵 ああ、とんびのやつは、高いところをこうやって悠々と……。

弥助 よしよし、わかった。じゃあ、とんびにしよう。吉、喜べ。ちようど町にいく用事があるから、そのついでにおまえの名前を買ってきてやろう。

吉蔵 へっ 何だつて？

弥助 名前を買ってきてやると言ったんだ。

吉蔵 名前を、買うのか？

弥助 あたりまえだ。新しい名前は買うに決まっている。そんなことも知らんのか。

吉蔵 名前なんて、勝手につけるものだと思っていた。

弥助 生まれたときはいいのさ。だが、名前を変えらるとなるとそうはいかん。ちゃんと売り買っているところから買わねばならん。

吉蔵 では、銭がいるのだな。

弥助 まあな。

吉蔵 それでは駄目だ。俺には一文もねえ。名前なんて買えねえ。

弥助 そうか。よしっ、乗り掛かった船だ。俺が銭を出してやろう。

吉蔵 えっ、弥助さんが。

弥助 おう。

吉蔵 それではあまりにすまぬ。それに貸してもらっても、俺には返すあてもないし。

弥助 おまえも借りをつくるのは嫌だろう。

おう、そうだ。俺が町に行っている間だけおまえが畑のめんどろをみてくれれば、それで銭の方は帳消しにしてもいいが。

吉蔵 そ、そんなことでのいか。

弥助 ああ、いいとも。俺とおまえの仲ではないか。

吉蔵 本当に？

弥助 いいと言ってるじゃないか。

吉蔵 ああ、ありがとう。弥助さん、なんて言ったらいいだろう。よろしくお願いします。よろしくお願いします。

弥助 じゃあ、畑の方は頼んだぜ。

吉蔵 ああ、まかせてくれ。しつかりやつておくから。

弥助が唄う。『名前の唄』の続き。

名は体をあらわすってね

立派な名前は鎧と同じ

きれいな名前は厚化粧で

つけてるうちに 慣れてくる

馴染んでくればしめたもの

出世魚のたとえもあるし

だから名前をかえたけりや
けちな人生を捨てたけりや

名前を買うのが一番さ

あつらえるのが簡単さ

戒名だって金次第

院殿居士なら高くつく

舞台暗くなり、村人1、2、3に明かり。

村人3 それで弥助は町に名前を買いに行つたのか？

村人1、2、笑い転げる。

村人2 馬鹿か。名前を買うやつがいるものか。弥助は町になんか行かねえ。

村人1 やつは、出かけたふりをしてずっと家にひそんでいたのさ。そうすりゃあ、あのお人よしの吉蔵が畑をみてくれる。

村人3 あっ、なるほど。

村人2 半月もやらせてから、いかにも今町から帰ってきたようによそおって、吉蔵のところにあらわれたのよ。

村人3 悪い野郎だ。

舞台明るくなる。吉蔵の家。

吉蔵 弥助さん、ほんとうにごくろうさまだった。くたびれただろう。

弥助 ああ、たいへんだった。こんなにたいへんだとは思わなんだぜ。

吉蔵 それで、首尾よく名前は買えたかね。

弥助 うん、そのことだが、あちこちあたつてみたのだが、どこでも「とんび」は売れてしまつてないのだ。とんびは人気があるらしくてなあ。

吉蔵 そうかあ。

弥助 おそらく、おまえと同じように、空を飛びたいやつらが買つていくんだろう。

吉蔵 ああ。
弥助 気を落とすな。それでだ、とんびは買えなかつたが、かわりにからすを買つてきてやつたぞ。

吉蔵 からす：：かい？

弥助 おや、気にいらん顔だな。

吉蔵 そういうわけでは：：。

弥助 いやいや、それは気にいらぬといった顔だ。そうかい、ならよしな。俺が足を棒にしてやつとさがして、しかもずいぶんと銭も使つたというのにその言い草か。わかつた、わかつた、もういい。

吉蔵 そんなつもりじゃねえ、な、許してくれ。機嫌をなおしてくれ。謝るから、気にさわつたなら、このとおりに謝るから。

弥助 ：：からすでいいのかい？

吉蔵 いい、いい。からすだつて、ちゃんと空を飛ぶ。だから怒らんでくれ、どうか怒らんで。

弥助 まあまあ、そんなに頭を下げるな。俺もな、おまえがあんまりわがまを言うも

んで、つい声を荒げてしまった。堪忍してくれ。しかしなあ、吉さんよ。からすでも買えただけめっけものだぜ。

吉蔵 うんうん、めっけものだ。

弥助 わかってくれたか。さて、それじゃあおまえさんは、今日からからすだ。からすの吉さんだ。

吉蔵 おお、おお。

弥助 ちゃんと返事をしないか。

吉蔵 ああ……あいよつ。

弥助 よおし、それじゃあ、次は新しい名前のお披露目だな。

吉蔵 お披露目？

弥助 ああ、村のみんなにおまえの新しい名前を覚えてもらわねばならんからな。

吉蔵 それは、ちよつと。

弥助 ちよつと何だ？ いいか、俺とおまえが知っているだけでは、名前を変えた意味がない。名前というものはみんなに呼ばれなければ、体に馴染まない。

吉蔵 そういうものか。

弥助 からすという名が、呼ばれることでおまえの体に馴染む。すると、それだけ体が軽くなるという寸法だ。

吉蔵 なるほどなあ。

舞台暗くなり、村人1、2、3に明り。

村人3 くつくくく。しかし、弥助はひどいやつだ。

村人1 あいつは子供の頃から、何かにつけては吉蔵をいじめていたからな。

村人3 それにしても吉蔵も、だまされていることに気がつかんのか？

村人2 それよ。みんなに、からすの吉さんなどと呼ばれるたびに体が軽くなるはずが一向に効き目が感じられぬので、さすがの吉蔵もなぜかと聞いた。

村人1 そうしたら弥助のやつ、こう言ったそうさ。昨日今日つけた名前にすぐ効き目

を求める方が図々しい。一年、二年辛抱で
きなくてどうすると。

村人 3 なるほど、うまいことを言うな。

村人 2 おいおいっ、噂をすればなんとやら
だ。あちらからお出でなすった。

舞台、明るくなる。

吉蔵のあとを子供たちがついてくる。

追い返すが、またすぐ戻って後に並ぶ。

子供たちが唄う『からすの吉さん』

からすの吉さん おはようさん

こんなに早から いそいそと

熊野権現のお使いかい

今年是不作か豊作か

判じてくださいれ もち三つ

からすの吉さん なきなさる

かかあ かかあとなきなさる

書いた誓詞は千と三つ

吉蔵 おい、おまえら、いい加減に。

子供 1 からすの吉さん。

吉蔵 あいよ。

子供 2 からすの吉さん。

吉蔵 あいよ。

子供 3 からすの吉さん。

吉蔵 (投げやりに) あいよ。

子供 4 からすの吉さん。

吉蔵、答えない。

子供 4 からすの吉さん。

吉蔵、知らん顔。子供 4、泣き顔になる。

子供 4 からすの……(泣きだす)

子供 1 ああ、泣いた。

子供 2 吉さん、答えてやってよ。頼むよ。

かわいそうじゃねえか。

子供 3 そうだ、そうだ。

吉蔵 ……わかったわかった。さあ、呼べ。
さあ。
子供4（子供1、2、3に促され、しゃくり
あげながら） か、からすの ……吉さん。
吉蔵 あいよっ！

子供4、大喜び。子供1、2、3も吉蔵
のまわりをとびはねながら「からすの吉
さん」を連呼。続きを唄いながら退場。

からすの吉さん おめでとさん
黒の紋付で にこにここと
山田の案山子と祝言かい
へのへのもへじの器量よし
突きすぎるな 藁の肌
からすの吉さん なきなさる
かかあ かかあとなきなさる
嫁（かか）は雀に気もそぞろ

村人2 よう吉さん。いやからすの吉さん、
調子はどうだい？

吉蔵 え、調子か？ はは、まあまあだ。

村人1（村人3に）まあまあ、だよ。

村人3 おい、吉さん、俺はまだ、そいつは
お初だぞ。よく見せてくれ。

吉蔵 ああ、そうか。さあ、よく見てくれ。

村人3 ほお、なるほどな。

吉蔵 そういうことなんで、よろしく。

村人3 よーく、わかった。それでどうだ、
軽い名前は。

吉蔵 あ、ああ。まあ、段々に。

村人1 そういやあ、前と比べて ……。

吉蔵 うん？ 何か変わったか？

村人1 気のせいか、おまえの口がな。

吉蔵 口が？

村人1 口が、とんがってきたような。

村人2（村人1に）そいつは、くちばしとい
うんじゃねえか。

村人1 そうかそうか、なるほどくちばしか。

吉蔵（口をおさえて）本当か。本当か（村人

3に）それは困る、それは困る。俺は、本物のからすになりてえわけじゃねえ。

あたふたする吉蔵。それを見て腹を抱えて笑う村人1、2、3。暗転。

2

吉蔵の家。背後から現われる弥助。手に何か持っている

弥助 おいつ。

吉蔵 ああ、驚いた！

弥助 おい吉蔵。いやさ、からすの吉さんよ。

おまえさんのためにたいした宝物を手に入れてやったぜ。

吉蔵 宝物だって。

弥助 そうよ、ほらこれを見る。

吉蔵 はあ、それが宝物かい？ いやはや何とも汚い着物だ。

弥助 汚いだと！ もつたいないことを言うやつだ。いいか、よく聞いて腰を抜かすなよ。これはな、あの有名な羽衣だ。

吉蔵 は、羽衣！ て、天女の羽衣か！

弥助 そうともよ、この俺がおまえの望みをかなえてやろうと思って、わざわざ手に入れてやったというわけだ。

吉蔵 そうか、しかし、そんなすごい宝物をどうやって手にいれたんだ？

弥助 ふむ、そのことだ。

弥助の唄う『ほんとうのお宝は』

世の中のやつらはみんな

鼻の脇に二つ

節穴があいているが

こいつがまったくの役たたず

せっかくのお宝の値打ちを知らぬ

そこが付け目さ 狙い目なのさ

欲深なやつらはみんな
きんぴかが好きで
古い品には手もつけぬ
こいつがどっこい掘出物で
ほんとうのお宝は目利きしか知らぬ
そこが付け目さ 狙い目なのさ

吉蔵 さすが弥助さん。俺じゃあ、そうはいかねえ。

弥助 あたりまえだ。

吉蔵 しかし、羽衣というのはもつと美しいものだと思っていたが、こいつはずいぶんと汚れて……。

弥助 馬鹿め、神代の昔から伝わった由緒あるものだぞ。それだけ古ければ、いいかげん汚くなるというものだ。

吉蔵 うん、言われてみればもつともだ。

弥助 よく見ろ。汚いなかにも、何か神々しさを感じられねえか？

吉蔵 うん、そんな気も……。

弥助 どうだ、いいだろ。

吉蔵 ああ、それで、俺がもらってもいいのかい？

弥助 もちろんさ、おまえのために手に入れたのだ。俺が持っていてもしようがねえ……
：ただなあ、手に入れるのに銭がなあ。

吉蔵 銭か……。

弥助 案外、高くついてしまった。きっとおまえがほしがらるだろうと思っただけ。それで無理をしたんだが。

吉蔵 弥助さん、すまん。でも俺には銭が。
弥助 わかつてるさ。そうだ、この間のようにしばらく俺の畑の畑のめんどろをみてくれな
いか。

吉蔵 そ、それでいいのか。

弥助 いいともさ、俺とおまえの仲ではないか。みずくさいことを言うな。

吉蔵 弥助さん。

弥助、吉蔵に「羽衣」を渡す。
吉蔵、押戴く。

弥助 さあ、試してみろ。

吉蔵 えっ、今かい？

弥助 もつたいたつけるな。俺もおまえが飛ぶところを見てみたい。

吉蔵 そ、そうだよなあ……ふっふっ、ああ、胸がドキドキする。

弥助 さあ、どうした。遠慮せずに飛んでみろ。

吉蔵 ああ。えーと……こうかな。

吉蔵、「羽衣」を羽織ってじっとしているが、何の変化もない。弥助、笑い出したいのをぐっと我慢している。

吉蔵 あれ、おかしいなあ。裏では……ないなあ。着方が悪いのかな。

弥助 どうした。

吉蔵 いや、それがどうも……。

吉蔵、パタパタとはばたいてみたり、その場でピョンピョン跳びはねる。

吉蔵 だめだなあ。

弥助 何しろ、相場に古いものだそうだから調子が出るまで時間がかかるんだろう。

吉蔵 そうかなあ……おお、そうだ。

吉蔵、急に思い立って、羽衣を着たまま屋根に上る。

弥助 おい、何をする気だ。おいつ。

吉蔵、屋根に上ると、裾を持ち上げ。

吉蔵 いきますよ。

弥助 おい、吉。何をしようってんだ。
吉蔵 ここからひよいと飛び降りれば、羽衣の調子も戻るんじゃないかねえかと。

弥助 そりやあ、そうかもしれないんが、おまえその：：あぶ（危ないという言葉を呑み込み）：：蛇のように飛べるだろうよ。

吉蔵 蛇はいやだなあ。

弥助 そりや：：いやだろ、あんなもの。

吉蔵 さあ、飛べっ！

吉蔵、いきなり屋根から飛ぶが、下へ落ちる。腰をしたたか打ちつけ、痛がる。

吉蔵 弥助さん。この羽衣、俺にはどうにもならん。使い方がまちがっているなら教えてくれんか。

弥助 まちがってはいないはずだが：：。

弥助、吉蔵から羽衣を受け取り、しげしげと眺める。

弥助 あっ！

吉蔵 どうした？

弥助 うーん、俺としたことが、こりやうかつだった。

吉蔵 え？ な、何がうかつだったんだ。

弥助 そうじゃないか、吉さんよ。羽衣というのは誰のものだい？

吉蔵 そりやあ、天女：：じゃないか。

弥助 そうだ、羽衣は天女の着物だな。ところで、天女というのは男か女か？

吉蔵 何を言ってる。天女というくらいだから、女に決まっているだろうが。

弥助 吉さんよ、おまえはどっちだ？

吉蔵（少し苛立って）男だ！ この俺が女に見えるかい。

弥助 これは女の着物だ。ところがおまえさんは男だ。つまり、男のおまえさんでは、本来女の着るべき羽衣で飛べるはずがない

というわけだ。

吉蔵 え？ だから：：これは：：女の：：え？ つまり：：うーん、つまり、つまり早い話、俺ではだめなのか？

弥助 いや、悪いことをした。すまんことをした。ほれ、このとおり（土下座する）。

吉蔵 いや、弥助さん。頭を上げてくれ、おまえさんは、俺のためにわざわざ買ってきてくれたのだし。銭もたくさん使った。

弥助 いや、こいつはおまえの役に立たぬ。役に立たぬものを買ったのは俺の失敗だ。銭のことは気にするな。

吉蔵 でも、弥助さんも悪気でなし。損をさせるわけにはいかん。俺、畑の世話でいいなら、またやらせてもらう。

弥助 そうか、すまんな：：しかしなあ、吉さんよ。せっかくだくさん銭を出して買ったものだ。試してみてはどうだ。

吉蔵 試す？
弥助 そうよ。男のおまえには無理だろうが、女ならきつと飛べるだろう。

吉蔵 うん、そうだな。そういうことだ。

弥助 村の娘の誰かに羽衣を試してもらったらどうだい。

吉蔵 うん、うん。

弥助 誰がいい？

吉蔵 誰って：：俺にはわからねえ。

弥助 そうだなあ、やっぱり名前だな。軽くて、いかにも空を飛びそうな名とえば：：おっ、いた！

吉蔵 誰だ？

弥助 つるさんだ。作次さんのところのつるさんだ。つるなんて、まあ、空を飛ぶためにつけたような名ではないか。

吉蔵 うん、からすよりずっといい。

弥助 何か言ったか？

吉蔵 いや、何でもねえ。

弥助 よし、善は急げだ。つるさんのところへ行ってこい。

吉蔵 えっ、お、俺がか？

弥助 他に誰がいる。

吉蔵 弥助さんも一緒に来てくれるんだろ。

弥助 それがダメなんだ。つるさんは、なぜだか俺のことが嫌いなようだな。だから俺がついていってはい、ま、ま、ま、話もま、ま、ま、んだらうよ。それじゃあ、困るだらう？

吉蔵 俺だって好かれていとは思えねえ。

弥助 そんなことはない。おまえは母親おもしろい。孝行息子だったから、結構、女たちに人気があるんだぞ。

吉蔵 そ、そんな……。

弥助 本当だ。ああいうやさしい人のところ

へ嫁ぎたいものだ、随分評判らしいぞ。

吉蔵（照れて）そんな、そんなことねえよ。

弥助 とにかくやってみろや。

暗転。

3

つると吉蔵。つるは名前に似合わず太目でいかにも横柄な様子。吉蔵はおどおどしている。

吉蔵 つ、つ、つるさん。

つる（独白）何だい、この男は。人呼び出してさ。貧乏人の変り者に呼び出されてもちつともうれしくなんてないわ。（吉蔵に）それで吉さん、何の用だい？

吉蔵 たっ、たっ、頼みがあつてきた。てつてつ、天女の。その、きつ、きつ、着物その、あの……こいつを着てくれ。

吉蔵、つるに「羽衣」を差し出す。

つる（独白）あれあれ、こりゃあ驚いた。着物なんぞどこで手に入れたんだらう。ふん、この私を嫁にとでもいう魂胆だね。そりゃ

おあいにくだが、いただけのものはいただけ
いておこう。(吉蔵に)おやおや、うれし
いね。私に着物をくださるっていうのかい。

吉蔵 あ、ああ。

つる じゃあ、遠慮なくいただいでいくよ。

(さつさと帰ろうとする)

吉蔵 あの、ここで羽織ってみてくれんか。

つる ここでかい。(渋々)じゃあ。

つる、ボロボロの着物に声も出ない。

つる こ、こ、こりや、なんだい！

吉蔵 それは天女の。

つる て、天女がどうしたって！

吉蔵 だ、だから天女が、その……。

つる 馬鹿にするのもいいかげんにしなよ。

何が天女だ。ええっ、何かい、私にはこの
ボロがお似合いとでも言いたいのかい。あ
んたがそんなに悪いとは思わなかった。ま
るであの弥助の奴と同じだ。

吉蔵 そんな、それは弥助さんが。

つる そうか、やっぱり……ええい、こんな
ものこうしてやる！

つる、着物をズタズタに裂く。

吉蔵 ああ、羽衣が、俺の羽衣が。

つる うるさいっ、この馬鹿！

つる、吉蔵を突き飛ばす。

暗転。

4

妙心寺の和尚と吉蔵。

和尚 吉蔵や、おまえ、聞くとところによると
空を飛びたいなどと言っているそうだな。

吉蔵、うつむいている。

和尚 村の衆はみんな笑っておる。もちろん
ときには、人に笑われようが、そしられよ
うが己れの意志を貫くことも大切じゃ。正
しいと信じた道を邁進することは悪いこと
ではない。だがな、おまえがうつつをぬか
していることは論外じゃ。正気でないと言
われても仕方がないぞ。

吉蔵 はあ。

和尚 おまえは、正直で働き者の立派な男じ
や。ただ難をいえば、あまりに人がよすぎ
る。それであの弥助のようなならず者にく
いものにされるのじゃ。

吉蔵 (小さな声で) 弥助さんは：俺のため
にいろいろ骨を折ってくれるのです。

和尚 骨を折るだと、あいつがか？：おま
えはまったく：まあ、弥助のことはどう
でもいい。とにかく、空を飛ぶなどという
大それた望みは抱かぬことだ。いいな。

吉蔵 和尚様、空を飛ぶのはそんなにも大そ
れたことですか。

和尚 まだ言っておるか。あきれたやつだ。
よいか、人や獣は地上を歩く。這うやつも
いる。魚は川や海を泳ぐ。そして空を飛ぶ
のは鳥か羽のある虫だけじゃ。飛ぶのは鳥
や虫に任せておけばいい。生き物にはそれ
ぞれに与えられた住みかというものがある
のだから。

和尚が唄う。『大それた望みは』

大それた望みは そうさな

大それた望みはでかすぎる頭巾

頭に乘らず顔まで隠す

顔が隠れりや目も覆う

右も左も知れぬゆえ

つい踏み外す人の道

大それた望みは　そうさな
大それた望みは長すぎる刀
腰に差したら地面に届く
地面に届けばずると
引きずるだけの空（から）の鋤
見栄にもならぬ役立たず

もつともつとは見苦しい

あれもこれもは厚かましい

欲で描く絵はさぞ絢爛

分相応が好ましい

己れを知るが美しい

神も仏もご照覧

吉蔵　しかし和尚様、人は修練次第で魚のよ
うに泳ぐこともできます。ならば鳥のよう
に空を飛ぶこともできるのでは。

和尚　吉蔵、わしはこの歳になるまで人が空
を飛んだのを見たこともなければ、飛んだ
という話を耳にしたことがない。仙人にも
迦留羅様にも会ったことがない。

吉蔵　迦留羅様とは何ですか？

和尚　八部衆とってな、仏様の御家来の一
人じゃ。ほれ、おまえも絵を見たことがあ
ろう。修験者の格好をして、背中に羽が生
え、顔が鳥のような……。

吉蔵　ああ、からす天狗様のことですか。

和尚　そうそう、それじゃ。

吉蔵　俺も、からすという名で。

和尚　まだ言ってるか。吉蔵や、鳥のほかで
空を飛べるのは神通力のある尊いお方か、
さもなくば狐狸妖怪の類じゃ。だから空を
飛びたいなどと願うのは畏れ多いことだ。
おぞましいことだ。

吉蔵　和尚様、仏様の御家来はともかく、仙
人というのとは俺と同じ人間ではない
のですか？

和尚　いい加減にしろ。わしはおまえと問答
をする気はない。仙人になりたいとでも言

うのか。おまえは百姓だ、それが不服か。つまらぬ望みは持つものではない。何でも久米の仙人は、娘の脚に気をとられて空から墜ちたと言うわ。お伽話でも所詮そんな結末じゃ。悪いことは言わぬ。少し頭を冷やさぬと、冥途の母親も悲しむぞ。

大それた望みは　そうさな

大それた望みは重すぎるふとん

身動きとれず居心地悪い

心地悪けりや寝付きも悪い

正気はどこにあるのやら

夢とうつつをふらふらと

もつともつとは見苦しい

あれもこれもは厚かましい

欲で描く絵はさぞ絢爛

分相応が好ましい

己れを知るが美しい

神も仏もご照覧

暗転。

5

道。吉蔵が歩いていっていると、前から洗濯帰りの村の娘たち。石が飛んでくる。

つる　このろくでなしの、空馬鹿がつ！

怯える吉蔵。頭を抱えて逃げていく。

つる　私の前に顔を見せたら、ただじゃおかないと言ったろう！

つると娘たちの唄『あきれたもんだ』

あきれたもんだ　驚いた
ここまでひどいと知らなんだ

病もこうじて 手遅れだ
何でも空を飛ぶとやら
空の病は気の病
毒がまわって 気の毒だ
毒を抜くには冷やすが一番
頭を冷やせ 水かぶれ

あきれたもんだ 驚いた
ここまでひどいと知らなんだ
病もこうなりや 笑い草
何でも空を飛ぶとやら
空の病は奇の病
あやしめずらし 魂汚れ
汚れぬぐうには冷やすが一番
頭を冷やせ 水くぐれ

6

吉蔵の家。よろよると倒れこむ慈空。

吉蔵 あれ、お坊さま、どうしました。

慈空 は、はらが……。

吉蔵 はら？ 腹が痛むのですか。

慈空 (かぶりをふって) め、め、め。

吉蔵 め？ 目が痛むのですか？

慈空 (大きくかぶりをふって) め、めしを、
どうか。

吉蔵 ああ、飯ですか。腹が減っているの
すか。ちよっと待ってください。

吉蔵、食べるものを持ってくる。

吉蔵 あいにく、こんなものしか。

慈空、吉蔵から奪い取るようにして、そ
れをむさぼる。

吉蔵 あれあれ、こりやあずいぶんと、減っ
ていたんだ。まあ、そうあわてず……(慈

空がむせるのを見て）ほら、いわんこつちやない。

吉蔵、湯を持つてくる。慈空、それを飲んで一息。人心地がついたよう。

慈空 すんでのところで、飢え死にするところでした。お恥ずかしい話だが、この三日というもの水のほか何も口に入れることができず：：まったく、あなたは命の恩人。

吉蔵 いやいや、とんでもねえことです。

慈空 ご挨拶がおくれました。私、諸国を行脚しております、慈空と申す者です。

吉蔵 お、俺は：：からす。

慈空 からす？ 珍しいお名前ですな。

吉蔵 その：：吉蔵ともいいます。

慈空 からすの吉蔵さん。

吉蔵 ええ、からすの吉さんと呼ぶ人もいます。吉蔵の蔵（ぞう）は、蔵（くら）という字なのでこれは重いんで：：その：：。

慈空 からすの吉さん：：ですか。

吉蔵 吉蔵は親から貰った名前で：：こいつは只です。からすの方は、弥助さんが町へ行ったときに買ってきてくれました。

慈空 名前を買ったのですか？

吉蔵 はい、銭は弥助さんが払ってくれて、それで俺は弥助さんの畑の世話をさせてもらいました。

慈空 はあ。

吉蔵 本当はとんびがよかったんですが、売れてしまっ。

慈空 売れ：：て？

吉蔵 しばらく名前の札をつけてお披露目しておりました。何しろ、みんなに呼んでもらわれないと名前の効きめは出てこないで。体も軽くならんというわけで。

慈空 あの、あの吉蔵さん。失礼だが、私には何のことやらさっぱり。ひとつ順を追って話してくださいませんか。

吉蔵 えっ？ 何だか恥ずかしいな。

慈空 そう言わずに、お願いします。

吉蔵 笑いますよ。

慈空 笑いません。

吉蔵 ……俺は、空を飛びたいと思って。

慈空 空を？

吉蔵 はい、空を。

慈空 はあ。

吉蔵 そうしたら弥助さんがおまえの名前は
重いから改名しろと。

慈空 それで、からすと。

吉蔵 はい。

慈空 軽くなりましたか？

吉蔵 いや、どうか。そんな気もするし、
変わらない気もするし……それから、弥助
さんは羽衣も買ってきてくれました。

慈空 羽衣ですか！

吉蔵 ええ、ところが、これが大失敗。羽衣
は天女の着物、つまり女の着物です。だか
ら男の俺ではダメだった。

慈空 はあ……。

慈空の唄う『こいつは底抜けの』

こいつはまったく

きわめつけの大馬鹿

さしずめ底のない桶だ

水が汲めない

向こうが見える

底抜け 間抜けの大惚けだ

頭のたががはずれてござる

たたけばポコポコ音がする

こいつはほんとに

とびつきりの大馬鹿

さしずめ底のない沼だ

足が立たない

あの世がのぞく

底無し 案山子の能無しだ

思案も知恵も浮かばぬでござる

口からぶくぶく泡は出る

こいつはまったく
きわめつけ
こいつはほんとに
とびきりの
こいつは底抜け
こいつは底無し
こいつはこいつはこいつは
めっけもんだ

慈空 吉蔵さん、あなたは本当に空を飛びたいのですね。

吉蔵 はい：：そうか、慈空さんはいろいろなところを歩かれていますから、もしかして空を飛んだ人を見たことがあるのでは。

慈空 ええ。
吉蔵 ある！ あるんですね、そ、それは仙人ですか？

慈空 いいえ。
吉蔵 モノノケの類じゃないでしょうね。
慈空 決してそんなものではありません。実は私の師匠というのが、飛行術にたけておりました。すなわち空を飛ぶのを得意にしておったのです。

吉蔵 じ、慈空さんのお師匠さんが！ ほ、本当ですか、本当ですか、それは！

慈空 はい。だから弟子の私の名前も、空を慈しむ、慈空とつけてくれたのです。

吉蔵 ほおほお、なるほどなるほど：：そ、それで、いったいどんなふうにして飛ぶのですか。相当な修業が必要なのでしょうか。ああ、そうだろうなあ。お、俺のような者には：：無理ですか。無理でしょうね。俺は馬鹿だし。慈空さん、あなた、飛んだことがあるのでは：：。

慈空 ちよつと、ちよつと待って！ 落ち着いてください。そう矢継ぎ早では答えられないものではありません。

吉蔵 申し訳ない、つい。

慈空 吉蔵さん、空を飛ぶのには神通力がい

るわけでもなければ、何年もの修業がいる
というわけでもない。

吉蔵 修業がいらぬ。

慈空 ただそのための特別な道具があればいいのです。

吉蔵 それは羽衣のようなものですか？

慈空 いいえ。

吉蔵 天狗の扇ですか、下駄ですか。

慈空 いやいやそんなものではない。私の師匠が使っていたのは、ええ……て、天翔帆というものです。

吉蔵 てんしよう……。

慈空 てんしようほ。天を翔る帆。帆は船の帆と同じ。

吉蔵 ほお、てん、しよう、ほ、ですか。天翔帆、天翔帆。

慈空 まあ、鳥の羽のかわりといったらわかるでしょうか。それを背中につけて、塔のてっぺんから飛ぶのです。

吉蔵 慈空さんも？

慈空 はい。誰でもというわけにはいかないのですが、私は一番弟子でしたから、何度かお許しをいただきました。

吉蔵 そうですかあ。慈空さんは、飛んだのか。ああ、いいなあ、うらやましい、うらやましいなあ。それで、どんなですか。

慈空 えっ？

吉蔵 ですから、空を飛んだ気分というものはどうなんですか。

慈空 ああ、ああ、それは……何というか、言葉にはできないすばらしさです。

吉蔵 そうでしょう。ああ、そうなんでしょうね。

慈空の唄う『空を飛ぶには』

空を飛ぶには何になる

鳥を真似ても無駄なこと

千回万回羽ばたけど

あの法術はままならぬ

空を飛ぶには何を
修業ですむなら楽な
千日万日かけた
あの法力は身につかぬ

誰もが一度は夢見るが
かなえられると思わない
この目でそれを見ぬかぎり
かなうこととは信じない

吉蔵 では、その天翔帆があれば、俺でも：
：その：：。

慈空 飛べるでしょう。吉蔵さんでも大丈夫
ですよ、きつと。

吉蔵 あ、あの、天翔帆は買うことは：：。
慈空 (きつぱりと) できません。売ったり買
ったりするものではないのです。

空を飛ぶには何が要る
金ですむなら安いもの
千両万両かけた
あの法悦はあがなえぬ

誰もが一度は夢見るが
かなえられると思わない
この目でそれを見ぬかぎり
かなうこととは信じない

吉蔵 貸してもらおうわけには。

慈空 それも無理です。

吉蔵 そうでしょう、そりゃそうだ。

慈空 自分でつくるしかないですね。

吉蔵 つくる？

慈空 私の師匠も自分でつくりました。

吉蔵 慈空さん、あなたは？

慈空 私も手伝いはしましたが。

吉蔵 あなたなら、作る事ができるんじゃない
ないですか。一番弟子だったあなたなら、
よく知っているはずだ。慈空さん、お願い

です。この通り。どうか俺に天翔帆の作り方を教えてください。

慈空 それは困ります。天翔帆は寺に伝わる秘儀。秘中の秘です。本当はそのこと自体よその人に話してはならないのですが、つい口がすべってしまいました。どうか、これだけでご勘弁を。

吉蔵 そんなことを言わずに、どうか、どうか、お願いです。

慈空 まして、そのつくり方を外に漏らしたなどとわかったら、ただではすみません。吉蔵 どうしても、だめですか……：：：そうですね、そうだろうなあ。

間。

慈空 だが吉蔵さんは、私の命を救ってくれた。命の恩人だ。

吉蔵 ……慈空さん。

慈空 秘密を守るのも大切だが、受けた恩にこたえるほうがもっと大切かも知れぬ。

吉蔵 で、では……。

慈空 お礼に、私が天翔帆をつくってさしあげましょうか。

吉蔵 ほ、本当ですか。ありがたい、ありがたい。

慈空 ただ、私ももう長いこと天翔帆にはふれていません。細かいところはすっかり忘れております。それらを思い出しながらとなると、できあがるまでにどのくらいかかるか、検討もつきませんが……：：：それでもよろしいですか。

吉蔵 かまいません、かまいませんとも。何年かかろうが、いや何十年かかろうがかまいません。

慈空 そうですか。それなら、ひとつやってみましょう。

吉蔵 やってくださいるか、ああ、うれしい。ああ、うれしい。

村人 1、2、3 に明り。

村人 1 おい、知ってるか。吉蔵のこと。

村人 2 いや、やつがどうした。

村人 3 へへっ、それなら知ってるぜ。

村人 1 おや、珍しい。

村人 3 吉蔵の家にいる坊さんのことだろ。

村人 2 坊さん？ 坊さんがいるのか？

村人 3 ああ、何でも旅の坊さんらしいがな。もう一月にもなる。

村人 2 へえ、そりやあ奇特なことだ。

村人 1 だがな、それがちよつとなあ。

村人 3 うん。

村人 2 おかしいのか。

村人 3 その坊さんというのがな、毎日、何をしてもなし、飯をたらふく食っては昼寝三昧。

村人 2 何だい、そりや？

村人 1 なのに吉蔵のやつ、一生懸命世話をしてやがるんだ。この間も、この寒いのに大沼でばしやばしややつてやがる。聞いたら、鯉をとつてるといふんだ。どうやらそれもある坊さんに食わしてやるつもりらしくて。

村人 2 それはたいそうなお客様だな。その坊さんというのはいったい何者だい？

村人 1 妙心寺の和尚様が聞いたそうだが、体が弱っている旅の坊さんをおっかさんの供養だと思つて面倒を見てるんだと。

村人 3 体が弱つてるように見えねえが。

村人 1 和尚様も相手が同じ仏につかえるものだから、それを世話をしようというのに文句は言えねえ。

村人 2 そりや、もつともだ。

村人 1 まあ、吉蔵もひとりぼっちだから話相手がほしいんじゃないかと。

村人 2 話相手なら、俺は若い女の方がいいな。坊さんなんてまっぴらだ。

村人 3 まあ、吉蔵は変り者だからなあ。

村人 1 変り者すぎるぜ、ありや。

村人2 まったく、まったく。

村人3 それとな、妙なことをしてる。

村人2 妙なこと？

村人3 竹を裏の林から切り出ししていた。

村人2 吉蔵がか？

村人3 いいや、あの坊さんが。

村人1 竹で箆でも編もうというのだろう。

村人3 そうは思えねえが。

村人1 夜中に吉蔵の家の側を通ったことがあるが、ずいぶん遅いのに灯りがついていたら。夜なべで箆をつくっているのさ。

村人3 そうかなあ。そんなふうには見えなかったが。

村人2 なあに、変り者のところには変り者が寄ってくるのさ。

弥助、しきりに吉蔵の家を覗いている。

弥助（独白）気にいらねえ。いったい何だつて、いつまでもあんな乞食坊主を家に置いておくのだ：：おかげで近頃じゃあ、あれだけ夢中になっていた空を飛ぶ話にのってこねえ。またひっかけてやろうと思ってるのに、俺の話をまともに聞きやがらねえ：：あの坊主だ。あの坊主が吉蔵に知恵をつけているに違いない。よおし、とっくり面を拝んでやろう。

弥助、吉蔵の家に入る。慈空が竹を削っている。

吉蔵 あ、弥助さん。

弥助 おう、吉さんよ。しばらくごぶさただったなあ。

吉蔵 あ、ああ。

弥助 なんでも、おまえのところに福の神がいらしたという話だが。

吉蔵 福の神？ そんなもの、来ねえ。

弥助 そうかい、そちらにいらっしゃるのがそうなんじゃないかい。

吉蔵 いや、この方は慈空さんといって。
弥助（ずかずかと上がり込み）俺にもお顔を
拝ませてくれんかい。
吉蔵 ちよつと、待って。

弥助、家の中の竹に気付く。

弥助 な、なんだ、この竹は。おい、吉よ。
やい、おまえら、この竹で何をしようとい
うんだ。おいっ。

慈空（作業を続けながら）箆ですよ。

弥助 箆だ。

慈空 竹の箆です。

弥助 か、箆だ。

慈空 いかにも。吉蔵殿に食わせていただい
ているのが心苦しいのでな。こんなもので
も売ればいくらかの足しになろうという
もの。

吉蔵 そ、そうだ。箆だ、こりや、箆だ。

弥助 箆だ。ふん、これがかい。冗談じゃ
ねえ、こんな……

慈空（いきなり強い調子で）では何だと言う
のですか。

弥助 何だって……それは、その。

慈空 箆でなければ、何ですか。

弥助 それは……

慈空 何ですか。

弥助 ……

慈空 何ですか。

弥助（気圧されて）あ、ああ、そりや箆だろ
うよ。

慈空、にやりと笑う。

弥助の唄。『俺より上手（うわて）だ』

悪（わる）には悪のにおいがある

だからいうんだ 鼻摘み者って

いやなにおいさ

たとえどんなにごまかしても

悪い同士にはわかる

同じにおいをかぎわけ

悪には悪の序列がある

だから譲るんだ 格上のやつにや

変な話さ

けれどどんなにおかしくても

悪い同士の礼儀

同じ士俵で争わぬ

弥助（独白）こいつは悪だ。俺なんかよりず
っと上手の悪だ。

悪には悪の器がある

だから飲み干す悪事の量も

決まっているさ

たとえどんなに力んでも

悪い同士のおきて

同じ宴に座らない

弥助 吉よ、こちらはたいした坊さんだぜ。
まあなんにしろ、坊さんを大事にするのは
いいこった。死んだおっかさんの代わりと
思っ、せいぜい世話するとい。

弥助、去る。

平然として黙々と作業を続ける慈空。

何だかわからず、おろおろしているだけ
の吉蔵。

暗転。

吉蔵の家。天翔帆が完成している。大型
の三角帆のようである。

7

吉蔵 慈空さん、これは？

慈空 これは……その……舵です。

吉蔵 おう、舵か。そうですね、舵がなけれ
ばどこへ連れていかれるかわからない。ふ
うむ、そうか、これを（舵とり棒を曲げな

がら）こうやるのでしよう？

慈空 ええ、まあ。

吉蔵 この縄はなんですか？ えらく太いのだが。

慈空 これはですね。

吉蔵 あ、待ってください。俺にあてさせてください……この縄は……体にまきつけておくのではないですか。

慈空 よ、よくわかりましたね。

吉蔵 そうでしょう。あはっ、そんな気がしたので。ああ、俺の思っていたとおりのものだ。なるほどこれなら飛べる。これなら飛べますよ。ねえ、慈空さん。

慈空 あ……ええ。

吉蔵 あらためてありがとうございます。このお礼は必ずしますから。

慈空 いや、そんな、お礼なんて……。

吉蔵 何でも言うってください。俺のできることなら何でもしますから……。ああ、うれしい。これが天翔帆か……。

吉蔵、天翔帆をなでまわしている。

吉蔵 ああ、早く試したいものだ。

慈空 えっ？

吉蔵 ですから、こいつを早く試してみたいものだ。

满面笑みの吉蔵と対照的に慈空の暗い顔。

吉蔵 いつにしましょうね。俺はもう天気さえよければ明日でもいいと。

慈空 だめだっ！

吉蔵 えっ。

慈空 いや、その……風です。風が。

吉蔵 風が？

慈空 風の方向を見なくてはならんです。

天翔帆は風を選びます。だから、いつでもいいというわけではない。

吉蔵 うーん、そうか。そうでしょうな。そ

れで、どちらからの風がいいのですか。

慈空 今時分はどちらからの風が多いですか？

吉蔵 そうですね、青葉山の方からだから：

：東風か、あるいは北風といったところですか。

慈空 それでは少し、待たねばならん。

吉蔵 いつまで待つのですか？

慈空 天翔帆は：：その：：西からの風でないとうまく飛びたてないのです。

吉蔵 西風ですか。

慈空 はい。西方浄土からの風。

吉蔵 うーむ。

慈空 それにもうひとつ慎重に選ばねばならぬことがあります。

吉蔵 それは？

慈空 どこから飛ぶか。

吉蔵 あっ、ああ、そうか。

慈空 師匠や私は寺の塔から飛びましたが、ここらにはそんなものはないでしょう。

吉蔵 ないですが：：そうだ、杉の木はどうですか？ 村はずれにある一本杉。あいつならずいぶんと高さもある。

慈空 あの木に、その天翔帆を担いでのぼるつもりですか？

吉蔵 高い所ならどこでもいいというわけではないのですね。

慈空 焦ってはいけません。天翔帆はできたのだから、じっくり構えましょう。

吉蔵 でも：：はい。あの、俺、吹流しを立てようと思います。そうすりゃあ、風の変わったこともすぐわかるから：：。

8

夜。屋根の上に天翔帆を背中につけた吉蔵がいる。舵棒を動かしている。風を受けると手応えがあるらしく、よろける。

吉蔵 おっ、おお、こりゃ、どうだ。

買ってもらったおもちゃに喜ぶ子供のよ
うな吉蔵。
慈空、家の陰からそのようすをじっと見
ている。

慈空（独白） あの馬鹿が、すっかりその気
になってやがる。本当にあんなもので空が
飛べると思ってたやがる……飛べるものか、
あんな出来損ないの尻みたいなもので、空
を飛べるものか。

吉蔵、『もしも空を飛べるなら』の3番
4番を唄う。

もしも空が飛べるなら
ずっとずっと限りなく
かなうのならばいついつまでも
体の重さも土のおいも
忘れてしまいたい
そしてすべての悲しみを
吹きとばしてしまいたい

もしも空が飛べるなら
一夜でさめる夢でなく
かなうのならば命をかけても
変わらぬ暮らしの繰り返しから
自由になつてみたい
そしてくたびれた殻を脱ぎ
新しく生まれ変わる

慈空（独白） 何かしてないと、居心地が悪か
ったから、あんな張りぼてをでっちあげた
が……ああ、なんてやつだ。私のことをほ
んの塵ほども疑わないのだ。

慈空の唄。『私のつくったものは』

私のつくったものは
ただの張りぼて
竹と紙とでつくった

から傘か提灯か
傘ならば濡れずにすむが
提灯なら夜道を照らす
私のつくったものは
役立たずの張りぼて

私のつくったものは
ただの張りぼて
嘘と法螺とで飾った
まやかしの小道具
香具師ならばわずかな損で
芝居なら木戸銭はいるが
私のつくったものは
命とりの張りぼて

吉蔵（独白）おお、そうだ。飛ぶのに格好の場所を思いついたぞ。八畳岩だ。裏山の八畳岩からならば高さも十分だ。

慈空（独白）八畳岩だと……あの崖の上から飛ぼうというのか。あんなところから飛んだら命はない。

吉蔵（慈空の台詞に重ねて）普通だったら命はないが、この天翔帆ならきつとうまくいく。あの慈空さんが精魂込めてつくってくれたものだもの。

吉蔵へのスポット消える。

慈空（独白）なんて男だ……ああ、駄目だ駄目だ。あいつを飛ばしてはならん。死なせてはならん……あきらめさせる方法がないのなら……すべてを打ち明けよう。卑怯なやり方だが手紙を残して、ここを逃げることにしよう。

私のつくったものは
ただの張りぼて
人のよさにつけこんだ
裏切りの贈り物
空なんて飛べるものか

地獄なら連れていく
私のつくったものは
死者に着せる帷子（かたびら）

9

朝。吉蔵の家。吉蔵、慈空を捜している。

吉蔵 慈空さーん。

そこらをひつくりかえしてみろ。

吉蔵 おーい。どこですか……おかしいなあ。

ふとんの下までめくる。

吉蔵 慈空さーん、風が、風が変わったんで
すよ……そこらを散歩でもしているのかな
あ。いや、いつも寝坊のあの人がそんなこ
とはないよなあ。

吉蔵、空を見上げて。

吉蔵 おお、天気も上々だ……それにしても
慈空さん……あれっ、あの人の荷物が……
確かここにおいてあったに……ない。まさ
か……笠もないぞ。あのボロボロの笠も。

吉蔵、何がおこったかわからない。

吉蔵 慈空さん……もしかして、行ってしま
われたのか。

吉蔵、座り込む。

吉蔵 考えてみれば、天翔帆のために、いや
俺のために、ずいぶん長いことこんな所に
ひきとめてしまったものなあ……慈空さん
はやさしい人だから、もう行きたいと言
出しにくかったんだろう。それに気付かな

い俺が悪かったのだ……それでも見送りも
させずに行ってしまったうなんて。慈空さん、
みずくさいよ。俺の飛ぶところを見てもら
いたかったのに。

吉蔵、置き手紙に気付く。

吉蔵 あれあれ、こりや書き置きだな。あは
は、まいったな、慈空さん、あいにくと俺
は字が読めんだ。あとで和尚様にでも読
んでもらおう……おっと、それより風だ。
いい風が吹いてきたぞ。

客席に旅姿の慈空。スポットがあたる。
ここからは舞台上の吉蔵と客席側の慈空
との同時進行。

慈空（息をついて）はあ、はあ、はあ……こ
こまでくれば大丈夫だろう。ああ疲れた、
疲れた……今頃、吉蔵は手紙を読んできぞ
怒っていることだろうな。私のことを恩知
らずのイカサマ坊主とのしっているだろ
う。地団駄踏んで悔しがついている。いや、
そうではあるまい。きつとがつかりして、
気が抜けて……ああ、すまない。でも吉蔵
さんよ、崖から落ちて死ぬよりはいいじゃ
ないか。

10

八畳岩。吉蔵が天翔帆を担ぎながらのぼっ
てくる。

吉蔵 ふう。こりや、大仕事だ。

一旦、天翔帆を降ろす。空を見上げる。

吉蔵 雲一つないとはこのことだ。さてと、支
度にかかるか。

吉蔵、ふんどし一つになり、岩の上から下をのぞく。

吉蔵 うわあ……たっ、高い。あれが、黄桜川か！ここからだど真田紐のようだ……ふう、こんなところから落ちたら、ぺしゃんこだろうな。

客席側の慈空、舞台方向を見上げる。

慈空 あ……あれ（目をこする）……あつ、まさか……いや動いてる……あの白いのは天翔……な、なんてこと……あれは吉蔵さん……手紙を読まなかったのか。読んだのにそれでも飛ばうというのか……だめだ、だめだ。ええい、ちくしょう、飛ばせてたまるか。もう恩知らずと言われようが、殴られようが蹴られようが……死なせるわけにいくものか！

慈空、その場で走り出すしぐさ。

舞台の吉蔵、天翔帆を体に縛り付ける。

そろそろと崖に突出た岩のへりに向かう。よろめく。

吉蔵 おっと、ふらふらするな（下を見て）うわあ……足ががくがくするぞ。そういやあ、お釈迦様が修業中に、崖から身を投げたって話を和尚様がしてくれたことがあつたなあ。確か、魔物が出てきて……命をよこせば、えーと胡瓜をくれる……胡瓜？そんなもの貰ってもしかたないな。違う違う、真理だ。真理って何だ？まあ、いや……ふう、それにしても高いぞ。

慈空（叫ぶ）吉蔵さん、やめてくれ、やめてくれ！

吉蔵 ああ、夏だ。すっかり夏だ……あれれ、（遠くに目をやって）おや？ありやあ、慈

空さんじゃないか、あんな所で手を振っている。やっぱり気になっていたんだな。
（そちらへ向かって）慈空さん、俺は大丈夫ですよ。うまく飛んでみますから。あなたが作ってくれた天翔帆で見事飛んで見せます……よし。

吉蔵、さらに岩のへりに近付く。

吉蔵 俺と一緒にするなんて畏れ多いが、お釈迦様もさぞかし怖かったに違いない。臆病風に吹かれて、慈空さんの苦勞を無にするものか！ 同じ吹かれるなら、この西からの風だ！

吉蔵、ふんどしで手を拭くと、舵棒を握りなおし、二度、深呼吸。

吉蔵 慈空さん、しっかり見ていてくれ。おつかあ、行くぞ！ 南無阿弥陀仏！

吉蔵、ポーンと岩を蹴る。

慈空 ああっ！

慈空思わず目をつぶり、その場にうずくまる。動かない。慈空のスポット消える。舞台、明りがつく。吉蔵、どんどん墜ちていくが、突然下からの風で空高く舞い上げられる。これ以降の吉蔵の飛行シーンは、実際に釣ることが難しければ背景の移動等の処理によって再現する。気を失いかけていた吉蔵、空の高みにいることに気付く。

吉蔵 あっ、あっ、ああ！ と、とっ、飛んだ、飛んだ、飛んでる、飛んでる、飛んでるぞーっ！

舵棒を握り締めながら下界を眺める。

吉蔵 あはっ、ははは。みんな、みんな小さいなあ。つくりものみたいに小さいなあ。あれは妙心寺だ。何だい、境内の松の木が盆栽のようだ。ふふっ、和尚様はいないかな。目を丸くして驚くだろうな……ああ、あれは弥助さんの家だ。見てほしいなあ。弥助さんもきつと喜んでくれるだろうに……：おお、そうだ！ 慈空さんは？（下界を見渡すが見つからない）どこだ……：うーん、見つからんなあ。でもきつとどこかで見えていくれるだろう。喜んでくれてるに違いない……：ああ、慈空さん、夢のようだ。夢のようです。

吉蔵、感極まって泣きだす。

吉蔵の唄。『夢ではなく』

これは夢でなく
本当のできごと
風が頬を切る
痛みも心地いい
もう このまま ああ このまま
死んでもかまわない

これは夢でなく
本当のできごと
胸が高鳴って
熱い血がかけめぐる
もう このまま ああ このまま
死んでもかまわない

吉蔵 ああ、たんぼや畑にあんなに大勢いるのに、誰も俺には気付かない。おい、上を見ろ！ えい、じれったい……：向きを変えるのは何とかできるが、高さを変えるのはうまくいかん。もつと低くならねば俺の声も届かんぞ。

吉蔵、気持ちよさそうに飛行。

突然からすの一群あらわれ、吉蔵のまわりを回る。天翔帆にとまるものもいる。

吉蔵 おっ、何だ。からすじゃないか。

そのうち一羽が吉蔵を突く。それを合図に一斉に襲いかかるからす。

吉蔵 こ、こらっ、よせ！ 俺はからすの吉

蔵といって、おまえらの兄弟分だ。兄弟にこんな仕打ちがあるものか！

からすは吉蔵のふんどしの中まで突こうとする。吉蔵、防ぎながら怒鳴る。

吉蔵 このわからずやの畜生ども！ 羽をひ

んむいてやるから覚悟しろ！ あっ、痛。痛、たたた。やめ、やめてくれーっ！

からすたち、吉蔵をなぶるのにあきたのか、さっといなくなる。

吉蔵 ふう、空の上も結構たいへんなものだ

な：：そうだ、天翔帆に鷹か鷲の絵でも描いておけばよかったんだ。そうすりゃ、さっきのような悪戯者も恐がって近寄らなかつたろうに。

吉蔵、のんびり飛ぶ。上ったり、下がったり。右に左に。その度に歓声をあげる。

吉蔵 ああ、あれは町だ。あはは、一生来る

ことはないと思ってたが：：まさか、こんな空の上から訪ねるとは：：屋根瓦が真っ黒にしきつめられて：：あれが大通りか：：大勢人がいるなあ、みんな蟻ん子みたいだ。忙しそうにして：：何だ、まぶしいなあ：：おお、お城だ。金の鯨がきらきら光ってる。

吉蔵 あーあ、あんなにたくさん人がいるのに、誰も俺には気付かないのか：：おーい
おーい：：よおし、ならば（ふんどしを
そごそやる）これで、どうだ！

吉蔵、小便をする。霧のように下界に降る
小便。虹になる。
吉蔵、飛行を続ける。

吉蔵（鼻をくんくんいわせて） うん？
こりや、何だ？ 何か、におうぞ。何だ、
こりやあ（ざざーっという波の寄せる音）。
おっ、おっ、おっ、おっ：：これは、これ
は：：おお（言葉につまる）。海だ。海だ
ぞ。海だ（笑う）：：ああ、でかいなあ、
でかい。まったく、でかい、でかいとは聞
いてはいたが、これほどとは思わなんだ。

吉蔵の唄『海を行く舟のように』

真つ青な海の上を
白い帆の舟が行く
鏡に写したように
我らは瓜二つ
小さな舟を操る人よ
あなたはどこへ行くのか

吉蔵 おお、あの鳥たちは、この天翔帆によ
く似ているな。とんびやからすなんぞより
ずっといい：：でも、あのにゃあにゃあ
という猫みたいな声はいただけいなあ。

果てなき海の上を
白い帆の舟が行く
きままな風が運ぶ
我らは花の種
小さな舟を操る人よ
あなたはどこへ行くのか

吉蔵 あああ、腹がへったなあ。こんなこと

なら握り飯でもつくってくればよかった。

周囲が徐々に暗くなる。雲行きが怪しい。

吉蔵 なんだ、暗くなってきたな。

やがて、ポツツ、ポツツと雨音。

吉蔵 あれ、雨だ。

それがポツポツポツと段々に切れ目がなくなり、まもなくザーッと勢いよく。雨が天翔帆にあたると団扇太鼓のようによかましい。

吉蔵 ひいーっ、こりやたまらん。ほんぶりだ、どしゃぶりだ……空の上では、雨宿りもかなわんぞ。

と、ブスツと鈍い音。天翔帆に穴。

吉蔵 あっ！ 何だ！

続けて、ブスツ、ブスツと穴があく。

吉蔵 あわ、あわわわ。

浮力を失って、天翔帆と吉蔵が墜ちていく。紙がめらめらと剥がれ、ついには骨だけの傘のようになる。くるくると独楽のようにまわりながら墜ちていく吉蔵。

吉蔵 おっかあーっ、たすけてくれーっ！

暗転。

好。村の女に、ものごいをするが、相手にされない。しかたなくとぼとぼと歩き出す。

村の女（慈空の背中に向かって）庄屋様のところへ行くがいい。

慈空 庄屋様？
村の女 おやさしい方だから、おまえのような者にもきつと何か恵んでくれるわい。

慈空、女に頭を下げる。
庄屋の家の庭先。
立派な構えに躊躇する慈空。

慈空（小さな声で）ご、ごめんください。
返事がない。

慈空（やや大きな声で）ごめんください。
庄屋の女房が現われる。

女房 はい。

慈空（土間に頭をこすりつけるようにして）何か、何か食べるものをいただけませんか。しょうか。もう三日も水のほか口にしておりません。哀れと思って、何か恵んでやってくだされ。菜っぱの切れ端でも何でもいただけます。どうぞ、お助けください。
女房 あれあれ旅のお坊さま。そんなところにお座りにならず、さあさ、遠慮なくおあがりください。

女房、慈空の手をとり、家に上げる。
落ち着かず、おどおどしている慈空。

女房 すぐに食べる物をお持ちしますから。

女房と交替に、女中が飯を運んでくる。
慈空、あつという間にたいらげると、おひつをひったくる。すさまじいばかりの

食べっぷり。

女中（あきれて）はあ、あんたの胃袋はまるで底の抜けた桶だね。

その言葉（底の抜けた桶）にびくつとす
る慈空。
若い庄屋、女房と小さな子供と一緒に現
われる。あわてて椀をおき、頭をこすり
つける。

慈空 庄屋様でございますか。本当にありが
とうございます。命をつなぐことができま
した。本当に、本当に……。

庄屋、じつと慈空の顔を見ている。

慈空 あの？ 私の顔に……何か。

突然、庄屋が慈空の手をつかむ。

庄屋 慈空さんだ、あんたは慈空さんだ！

慈空、相手に心当たりがない。ぽかんと
している。庄屋は泣きながら、慈空にと
りすぎる。

庄屋 おなつかしい、おなつかしい。こうし
てまたあなたに会えるなんて、仏様のお導
きだ。朝晩祈ったかいがあった。

慈空 あの、庄屋様、私といったいどちらで
お目にかかったんでございましょうか？

庄屋 慈空さん、分らないですか。俺は吉蔵
ですよ。

慈空 き、きち……。
庄屋（吉蔵） あなたに天翔帆をつくっても
らった、吉蔵です。

慈空 き、きち……馬鹿な、そんなはずはな
い。私はこの目で見たのだ。吉蔵が八畳岩
から、崖から墜ちるのを……それでは、ゆ

幽霊だ！

慈空、庄屋の手を振り払うと、とびのき、庭にひれふして手をあわせる。

慈空（ふるえながら）許してくれ、許してくれ、どうか成仏してくれ。南無阿弥陀、南無阿弥陀……。

吉蔵 いやだな慈空さん、俺は幽霊などでない。こんな昼間から幽霊が出るものか。それにほらこのとおり、足も二本ある。

着物の裾をめくる。

吉蔵 いやいや、死んだと思われても無理はない。実のところ、危ない目にあつたのだから……しかし慈空さん、あなたがつくつてくれた天翔帆で俺はすばらしいおもいをさせてもらった。空を飛ぶのがあんなにすばらしいことは。

慈空（つぶやく）飛んだ、だと……。

吉蔵 いや、実に快適でした。

慈空 そんな馬鹿なことが。

吉蔵 初めて町も見ました。海も見ました。

慈空 飛んだ……あれが。

吉蔵 ところが途中で雨にふられました。

慈空 雨に……あんな紙を張つたものが水に濡れたら。

吉蔵 そうです。たちまちバラバラになつて俺は空の上からひゅーっと。

慈空 ではやっぱり幽霊だ！

吉蔵 最後まで聞いてください。俺はうまいこと藁葺き屋根の上に落ちたんです。まあそれでも天井を突き破って座敷の真ん中に落ちたのですが、さらに運のいいことに、そこにはちようど干した布団をとりこんで積んであつたんです。

慈空 はあ……。

吉蔵 命には別状なかったが、それでも腰をたたか打つたので、一月は身動きできま

せんでした。

慈空 そうですか。（女房に）しかし、落ちてこられた方はさぞかし驚いたでしょう。

女房 はい、それはびっくりしました。恐ろしい音がしたかと思ったら、ふんどし一丁の男が落ちてきたのですから（笑）。

吉蔵 やれ雷様が落ちてきたと大騒ぎで。

慈空 では、落ちた先というのは。

吉蔵 はい、この庄屋の屋敷でした。

女房 初めは父も私も空を飛んできたなどというのは信じられなかったのですが。

慈空 そうでしょうなあ。

吉蔵 怪我が治ったので村に帰ろうと思ったのですが、聞けばずいぶんと遠いし……それで、しばらくこちらで働かせてもらっていたのですが。

女房 父が吉蔵さんのことをたいそう気に入って。

吉蔵 おや、おまえは気に入ってくれなかったのかい。

女房 そんな……あなた。

吉蔵と女房、顔を見合わせ照れ笑い。

女房が唄う『天から降ってきた自慢の婿殿は』。途中から吉蔵も一緒に。

うちの婿殿は天からの授かり物

夕立と一緒に空から降ってきて

ついでに天井に大穴をあけたが

何しろ名前が吉の蔵（くら）

縁起がいいことこのうえなし

天下一の自慢の婿殿

うちの婿殿は根っからの働き者

お日さまと一緒に明けから暮れるまで

おまけに陰日向も手抜きもなしで

そのうえ名前が吉の蔵

縁起がいいことこのうえなし

天下一の自慢の婿殿

うちの婿殿は馬鹿がつく正直者
赤子と一緒に誰からも憎まれぬ
箱入り娘もすっかりご執心で
とにかく名前が吉の蔵
縁起がいいことこのうえなし
天下一の自慢の婿殿

うちの婿殿は天からの授かり物
夕立と一緒に空から降ってきて
仲人の雷さんは挨拶もないが
何しろ名前が吉の蔵
縁起がいいことこのうえなし
天下一の自慢の婿殿

吉蔵 そういうわけで村に帰るのはあきらめ
まして、天翔帆の残骸を埋めて父母の墓の
かわりににいたしました。

慈空 そうですか……。

女房 父が昨年亡くなりましたので、今では
この人がこの村の庄屋でございます。

慈空 なるほど……あの、吉蔵さんが庄屋様
か。えらい出世だ。

吉蔵 似合わないでしょう（笑）。

慈空 いやいや、立派なものだ。なかなか貫
禄もついた……（女房に）あなたのお父上
は、人を見る目がある。この人は不器用だ
が、裏表がない正直者だ。人を疑うという
ことを知らない、ば、馬鹿みたいに……馬
鹿みたいに（言葉につまる）。

女房 慈空様のことは毎日のように聞かされ
ておりました。自分の夢をかなえてくれた
恩人だと。今日の自分があるのもすべて慈
空様のおかげだと。

慈空（独白） 恩人？ 私が？ とんでもな
いことだ、私なんて、私なんて……。

慈空の唄。『眠れぬ夜が』

あの日から ああ あの日から
一日だって片時だって

心休まることなどなかった
竹藪のさわぎに耳をふさぎ
からすの姿におびえ
西からの風が吹けば
真夏でも凍えた
あの日から あの日からずっと
忘れたことなどなかった

慈空 三年。なんてこった三年も、俺は。

あの日から ああ あの日から
一晚だって つかの間だって
静かに眠ることなどなかった
ぼろぼろの「あれ」を背負った
血塗れの顔に追われ
うなされて目覚めれば
真冬でも汗まみれ
あの日から あの日からずっと
忘れたことなどなかった

吉蔵 慈空さん、しばらくここで養生してく
だされ：：それより、もしおいやでなかつ
たらこの村で暮らしませんか。大きくはな
いが、ちようど空き寺もある。そこでうち
のせがれやこの村の子供らの先生になつて
くれませんか。

慈空 わ、私が：：。

吉蔵 やつてください、ぜひ。

女房 慈空様、私からもよろしくお願いいた
します。ただ、ひとつだけ、お約束くださ
らないと困るのですが。

慈空 約束、ですか。

吉蔵 おいおい、おまえ、何を：：。
女房 もう天翔帆だけはつくらぬとお約束く
ださい。息子たちがこの人のようにどこぞ
に飛んでいかれてはたいへんですから。

慈空、吉蔵、頭をかきながら笑う。

吉蔵 ところで慈空さん、ずっと気になって

いたことがあるのですが。

慈空 はい、何でしょう？

吉蔵 あの日、慈空さんが残していった書き置きには一体何が書いてあったのですか？

暗転。

再び舞台明るくなる。

吉蔵、慈空、女房が唄う。『もしも空が飛べるなら』の一番、二番。途中から弥

助、和尚、村人1、2、3が加わる。

『もしも空が飛べるなら』の三番、四番では、途中からつる、村娘、村の子供たち

ちが加わる。

出演者全員で歌い上げる中、幕。